

2017-07-10

卒業生座談会

江種教授 「それでは、第2部と、1時になりますから、座談会を始めたいと思います。
一応動画でアップされるみたいなので、化学メジャーの学生さん向けの話もしていこうかなと思います。それでは、もう一度OBの方たちに、いろんなことを聞きながら話していこうかなと思うんですけども。まず塩谷さんが最初に、栗田工業、知ってますか？って言ったときに、1人も手を挙げなかったのはちょっと。やっぱり、ああそうなのか、ていうのが実際のところなので、栗田工業、水処理分野の日本の最大手の会社で、たぶん授業した何人かの人にはやったことあるんだけど、新聞の、なんとか新聞って書いてる真下のところにだいたい、ちょっとした広告出るんだけど、あそこでも栗田って出てるよね。」

塩谷氏 「そうですね、右の。」

江種教授 「右の下のところ。」

塩谷氏 「縦。」

江種教授 「縦のところに、なんか朝日新聞、読売新聞って書いた真下にだいたい、企業の名前がどんって出るところがあって、たぶん一番目立つところに、ね。あそこによく出たりしてるようで、日本のトップクラスのプラントエンジニアリングの会社なんですけども。そういう会社を、君たち自身、あまりよくわかってないということなので、ちょっと塩谷さんに、栗田工業の仕事の内容をちょっと話してもらいたいですけども、プラントエンジニアリング、特に水処理の会社っていう単語がありますね。もうちょっと何かこう、どういう業界なのか。たとえば、ライバル会社にどんなのがあるのかですね。あと、栗田工業自身が、今からどういう展開をしていこうとしてるかとかですね、全体的に。」

塩谷氏 「わかりました。水処理というのは、やっぱり環境に深い関わりがあります。私たちの会社も水と環境がキーワードになります。一番わかりやすいのは、工場などで産業活動をするといろんな水が出てきます。たとえば、紙の製紙

業界ですと大量に水を使用し、それをそのまま当然流すことができないため、その水処理を請け負ったりもします。先ほどプラントエンジニアリングの話がありましたけれども、そういう工場の設備が、うまく稼働できるように薬品を使って、設備を動かすことも行っています。たとえば、配管について、普通に水を流してもそのままだと配管が詰まってきます。それをスケールっていうんですけど、薬品を使って、スケールがつかないようにします。そうすることによって、プラントの稼働率が上がり、問題なく動くようになりますので、私たちは、どちらかと言うと黒子の役割を演じています。また半導体等の電子部品の汚れを取るために超純水というものを提供して、お客さまの工場の安定稼働に貢献するというようなことをやっています。」

江種教授 「ごめんなさい、いっぱい質問して、その1つに答えてもらったんですけど、そのなかでちょっと、またお聞きしたいことがあったんで、ごめんなさい、それに付き合ってください。そうすると、プラントエンジニアリングって水処理がメインなんで、やっぱり水処理を機器を開発するというのが1つの会社のメインだと思うんです。でも、今の話を聞いてると、そればかりじゃなくて、実際的にいろんな工場のシステムを作ったり、それがどううまく稼働していくかっていう、トータル的な設計調査、そういったものも非常に大きな仕事になってくってという話なんですね。そうなってくると、たとえば機械の開発は機械系の人がいまいませんけれども、工学の分野、たぶん栗田工業さんだと、いろんな技術職でもいろんな分野の大学生を採用してると思うんですけども、たとえば彼らのような環境職とか建設系のような分野出てる学生とかですね。あとは、きょうはいないんですけども、メインに化学を学んできた学生なりだとかですね。そういうプラントエンジニアリングは栗田工業さんの例でいいんですけども、どういう仕事をしてるかっていう、部下の方とか上司の方とか同僚の方とか、もしわかる範囲でご説明してもらえればなと思います。」

塩谷氏 「うちの会社の職種は、まず営業、それからあと先生おっしゃった技術ですね、設計、開発。あと、現場、プラントを作る工事部隊というのがいます。だいたい、この5つに分かれます。結論からいうと、環境だろうが化学だろうが、どこの出身の人も、いろんなところに行きます。大学院の人がこられても、

営業に行く場合もあります。それは、うちの会社の営業スタイルが、エンジニアリングとして、単に物を1つ売ってくるっていうような営業じゃなくて、ソリューション、課題を解決するというのが、1つ重要な仕事です。そういうときに営業でも高度な知識を求められたり、提案力というか、そういうところが必要になってきますので、いろんなところに行きますっていうのが結論です。」

江種教授 「次、下村さんなんですけども、下村さんは同じ、実をいうと、図らずもといえますか、就職してからやってることは、塩谷さんと実は同じ土壌・地下水汚染の浄化ということなんですけど。ただ、塩谷さんが栗田工業っていう水処理のメインにする会社であるのに対して、DOWAホールディングス、エコシステム、もともと鉱山の非鉄金属系だったんですけども。特に非鉄金属という部分があって、その何かしら、やっぱりそういう分野が、土壌浄化とかに取り組むっていうメリットっていうのは。たぶん水処理の会社と違って、彼ら自身、栗田工業さんは知らなかったにせよ、イメージはたぶん僕の授業でも、廃水処理とか、そういうなのやってるので、わかると思うんですけど。逆にいうと、ちょっとDOWAホールディングスさんっていうふうなところ、わからないと思うんですけども。会社の特徴みたいなものとか、技術的なものとか。」

下村氏 「もとの会社は鉱山会社ということで、ほとんど岡山の鉱山、柵原鉱山というところと、秋田の小坂鉱山という2つですね、大きな鉱山があったんですけども、平成に入る前、前後で鉱山閉鎖しまして。その鉱山を掘って、鉱石を製錬などで金属にしていく工程があるんですけども、そういう設備も残ってましたし。あと鉱山の1つの問題点は、鉱山廃水というのがございまして。雨がたまるんで、鉱床、金属が多いところに、また出てくる水というのは、非常にpHが低かったりですとか、重金属が多かったりですとか、直接川に放流できないという問題があって、そういった高排水処理の技術があったというのがあります。それから、工場が残ってましたんで、その工場を使って土をきれいにするという工場を作りました。そのほか、鉱山、鉱脈を探すのに鉱脈調査をずっとしてたんですけども、そういった技術を使って、土壌調査に転用していったということがあります。非鉄会社の土壌部門の強みとい

うところですかね。あと、2期生の先輩に、同じDOWAホールディングスに入社された方がいるんですけども、その方は小坂鉱山というところで、今、処分場があるんですね。廃棄物の処分を、埋め立て処分場というのを持っているんですけども、そこの管理をされてて、そのあと出て、今年の4月からタイのほうに行きまして、タイで処分場がありますんで、そういった管理をしているというような感じですね。」

江種教授 「ありがとうございました。結構、お二人がされてる仕事は同じような土壌汚染の浄化なんですけど、やはり水処理とか機械、プラントエンジニアリングの会社と非鉄のところで、やっぱり強みも違うんで、それも特徴活かしているんなことをやっていますね。タイに4月から。そうすると、たしか前も聞いたけど、結構海外に出てるんですよ、仕事として。海外ではどんなことやってるって、ちょっと紹介できること、紹介してもらえますか？」

下村氏 「日本の鉱山って、もうなくなっちはいるんですけども、日本で金属を製錬所で鉱石を買ってきて、それを金とか銀とかに製錬する工場はまだ動いてますんで。海外の鉱山に人が行って、そこで鉱石を掘ってるという人もいますし、海外の鉱床を新たに探しにいったる人。あとは5つ事業会社があるんですけども、そのなかの熱処理部門というのがあるんですが、自動車メーカーの部品を焼き入れしたりとか、そういう加工するところだと、自動車の工場というのは世界各地にありますので、そういった自動車メーカーが新しく工場を作ると、その近くに工場立てて、同じような熱処理をしてるということなんです。幅広く、海外勤務もされてる人もいますんで。」

江種教授 「ありがとうございました。それでは続いて更田さんにお聞きしたいことがあるんで。やっぱり更田さんは、一度民間に出てから、公務員に再就職されたということなんですけど、まずはやはり、そのきっかけを聞かないといけないのかなと思いますんで、民間に一度就職されたあと、公務員に変わった理由とか、そのあたり聞かせてもらえますか？」

更田氏 「僕、最初の民間入ったときは、設計とかしたいなと思って、民間。環境に関わる仕事がしたいなと思って、さっき紹介させていただいた、よしみねっていうボイラーメーカーに入りました。その会社で、嫌やったから公務員なったとかじゃないんですよ、正直。なんでかっていうたら、その、よしみねって

いうところは、海外とかも、結構、全国いろんなところに、僕も現場とか行ったりしました。でも、部署が違ったっていうはあるかもしれないですけども、1回現場に行ったら、もうその現場に行くことはないんですよ。その工事部門にいたら管理とかするんですけども、僕行ってたのは技術部門で設計とかやってたんで。そのときに、やっぱり自分がやった仕事を、よく身近に感じたいなと思ひまして。それはなんやろなと思ひたときに、ふと、僕の祖父母が泉南市で住んでまして、たまたま広報を見たときに、泉南市の土木職っていうのがありまして。受けるのは別に自由やし、受けるだけ受けようかなと。正直軽い気持ちで受けたんです。合格いただいて。今、泉南市で働いてるんですけども、先ほども紹介させていただいた土木とか、自分がよく普段通るところを、自分が工事とかで設計した道とかを、よく通るんです。それが生きがいておかしいんですけども、自分の関わった仕事を身近に感じることが、今のとこできてます。この、身近に感じたいからと思ひて、まず転職っていうふうに、正直周りにいろいろアドバイスとか求めたりしたんですけども、身近に感じたいと思ひて、泉南市受けて、今、働かせていただけてます。それが転職した理由です。」

江種教授 「ありがとうございました。それじゃ、具体的に資料見せていただくと、あれはレベルでのぞいたとこですよ。」

更田氏 「ああ、そうですね。」

江種教授 「あれで、実際に測量をやってるんですか？」

更田氏 「測量は実際します、現場に行つて。」

江種教授 「現場で。同じように公務員志望の学生が多いと思ひるんですけども、なかなか、それでもあんまり公務員ってどんな仕事してるの？というのが、今ひとつわかつていない。われわれ自身も、あんまり押しえきれてないんで、1日の仕事でもいいんですけども、具体的にどういう仕事を主にしてるのか、もう少し詳しく。案外、あんな測量してるなんてのも、びっくりしたぐらいなんですけども、私も。今いるところでもいいんですけども、だいたいどういう仕事をメインにしてるのか、ちょっとそのあたり、具体的な公務員の土木職での仕事っていうのを、もう少し説明していただければなと思ひます。お願いします。」

更田氏 「朝 9 時からなんですけども、9 時に着いて、メールとかチェックをして。新しい現場があるときは、先ほどの写真で、まず測量。レベルのぞくだけが測量じゃないですけども、舗装の道路やったら舗装する面積を、先輩や上司とかと一緒に。1 人では測量ってできないんで、一緒に行ってもらって測量して、職場に戻ってきて、舗装面積何平米でいくらかかるのか、予算の大きな民間とは違って、予算の範囲内でしか仕事できないんで、その予算に収まるように積算して。実際、積算と同時に CAD を使って。学生的时候は僕も CAD 使ったこと全くなかったんですけども、民間で CAD 教えてもらって。それが今に生きてるってのもあるんですけども、それを CAD で図面化して、あとは工事を、実際に僕らが工事をするわけじゃないんで、業者に委託して、その業者委託終わった、工事が終わったあとに、先ほども言わしていただいたんですけども、検査っていう形でやらしていただいています。現場によって、どんくらいの期間積算したり、設計したりというのは違うんですけども、測量はそんな時間かかんないんですけども、積算と設計で、早かったら 1 日で終わるのもありますし、長かったら 1、2 週間かかったりするのもあります。そういった感じの流れで仕事さしていただいています。」

江種教授 「ありがとうございます。今の話していただいたことで、ちょっと塩谷さんと下村さんに、仕事の内容を写真で見せていただいたんですけども、業務の流れっていう、一連の土壌汚染の調査から始まっているんですけども、たぶん、塩谷さんや下村さんがやってることは限られてると思うんです。ボーリング機械の対応している人が写ったりしたんですけど、そういうのをしてるわけじゃないんですよ。主に調査とか設計とか、その一連の土壌汚染の調査から対策をしていくなかで、塩谷さんと下村さんは、どういうことをやってるのかと。あの部分の、どのあたりを担当してるのか、ちょっと具体的に。もしかしたら全部やることもあるのか、ボーリング、社員、全部やるか、というような、全部できたらそこでやってるのか、このあたりのこと、ちょっと簡単に話して。」

塩谷氏 「私は設計なので、まずやることとしては、営業の人と一緒にお客さまのところに行って、そのニーズを聞いてきます。いつまでに、たとえば土地の汚染状況を調べて、もし汚染があるんだったらなんとかしたい、というような依

頼を受けます。それを踏まえて持ち帰って、先ほどと一緒にだと思っんですけど、社内でどのような調査をするのか、どのような浄化をしたほうがいいのかを考えて、設計します。設計した計画書や費用を営業に渡し、営業がお客さんに提案します。さらに受注したら、それを業者さんにやってもらうというのが、主な仕事となります。業者さんから調査のデータを受領し、それを基に、設計し、浄化仕様を考える、設計の根拠というか基礎データを作っていくこととなります。ですから、基本的には、現場に行って、工事部でない限りは、現場に行って汗を流すということは少ないです。データをもとに設計をする、考えることが一番の仕事と思っています。」

下村氏 「違うところがない、ほとんど同じ。」

江種教授 「ほとんど同じだそうです。それでは、もうずいぶん時間もきてるんですけど、あとですね、1 つお聞きしたいのが、たぶん就職の話なんですけれど、民間、土木職の場合、だいたい土木職で採用するから、こういうプラントエンジニアリングや、非鉄のこういうような環境浄化事業とかやってる会社で、技術職、先ほどお聞きしましたけど、結構環境から機械から化学から、いっぱい入ってると思うんですけれども、わかる範囲で結構なんですけど、だいたい年間栗田工業さんや DOWA エコシステムさんとかで、技術者で何十名ぐらいの採用をして、関係するような、彼らが行くような環境関連の分野出身者とか、化学出身者とかが、だいたいいいので、まあ何人ぐらいいるかといったようなこと。あとは、大学院も学部もたぶん、分けて採用されないと思うので、院卒の割合と学部の割合と、おおよそのざくっとしたものでもいいので、わかる範囲で、教えてもらえればなど。」

下村氏 「弊社、DOWA ホールディングスで、事務系の人だいたい 10 人ですね。ほんで、技術職というんで 40 人ぐらい。で、1 年間、だいたい 50 人ぐらいになります。で、化学と環境出身の方、だいたい合わせると、10 ぐらいですかね、そのうちの。そのほかは機械ですとか、まあ鉱山会社ですんで、そういう鉱山関係の地学、地質系の人とか、あとは金属系の人ですかね、が多いです。それと、事務系の方は、ほぼ学部の人になってます。技術系は、9 割が院卒だったり、多くて 1 人とか 2 人が学部だったりですね。」

塩谷氏 「栗田工業も採用人数は 40 人ぐらいですね。そのなかで環境や機械という決

まりはなく、その年によって、いろんなどころから採用してるんだと思います。文系の方は、40人のうちの5~6人ですかね。下村君と同じで、ほとんどが営業に行っていると思います。技術系はほとんど、7~8割が大学院だと思っています。」

江種教授 「じゃあ、そうすると、35名ぐらいの技術職でも、分野と違って、機械が何名とか、環境が何名とかっていうふうなそういうある程度の分野ごとの枠があるというよりも、その年にエントリーがあった人のなかから、いい人を選んでって、その人、まあたとえば、環境分野からいい人が多かったら、その分野は多くなるとか、化学が多ければ化学が多い。そういうような感じですかね？」

下村氏 「結果、そうですね。」

江種教授 「なるほど、ありがとうございました。それじゃあですね、残り5分ぐらいになってきたんですけれども、今の話を聞いてなんか、学生の君たちから何か、こういうことを聞いてみたいなあというのがあったら、ぜひ聞いてもらえればとおもうんですがね。一応民間企業で、下村さんが何年目、7~8年？」

下村氏 「8年。」

江種教授 「8年目で、塩谷さんがもう、」

塩谷氏 「15年。」

江種教授 「更田さんはね、公務員になってからまだ2年目、3年目？」

更田氏 「今で3年。」

江種教授 「3年目ぐらいですね。ただ、社会人経験はあるんで、十分仕事も頑張ってると思うんですが、何かないですか？何でもいいですよ。はい。」

坂本教授 「学部卒で就職する場合は、今の話を聞いていたら、もう公務員で、まあ民間のところは、もう院卒ばかりっていうふうにお伺いしたんですけども、学部卒で民間ということには何か特徴をお願いします。」

江種教授 「学部卒、院卒が多くなってしまいう理由みたいなもの、まあ採用担当はしてないんで、そういう意味ではわからないと思うんですけど、実感として院卒が多くなってしまおうと？」

塩谷氏 「うん、そうですね。」

下村氏 「まあ学部卒で技術の方を採る会社さんも多くあるとは思うんですけど、恐ら

く技術的なことを保有してる会社さんになりますのでね、栗田さんも。です
んで、学会発表等あるんですね、たまに。社外発表とかですね。そういった
ときに、院卒だったりとか、ドクターの方が発表したほうが、会社としては、
やっぱり多くなるというんですかね、そっちを採るかなあ、みたいな。」

江種教授 「そういう意味で、下村さんとか塩谷さんも、いろんな学会とかで発表もし
たりしてるということなんで、結局会社に入ってから技術開発とかをして
いく上で、やっぱりそういうような研究みたいな、勉強みたいなことを続け
ていってるってことなんですかね。だから、そういうような勉強とか、
研究とかを続けていくってことを仕事としてやっていこうと思えば、や
っぱり大学院まで積極的に行く学生のほうが意欲があるというような点多
くなってくるとかそんな感じなんでしょうか、勝手に思ってます。」

塩谷氏 「確かにエンジニアリングメーカーのような会社はたとえば研究なんかだと、
第一線の研究を求められますので、大学院まで行っている人は専門性が高い
と思われるのはしかたないことかと思えます。あと、大学院で研究をし、修
論を作成すると、それなりに文章力や考える力もつき、自信もあったりとい
うところで、会社としては使いやすいと考えているのではないかと思いま
す。」

江種教授 「で、ちょっと更田さんは公務員なんですけども、先ほど坂本先生からの質
問があったときに、大学院に行ってよかったなあというようなことでちょっ
とお答えいただいたんですけれども、学部卒は公務員というようなイメージ
持ってるみたいなんですけれども、ほんとにそうなのかなっていうようなこと何
か。いや、そうだというんだったら、もうそう答えていただくしかないんだ
けど、大学院を出たからこそ公務員の仕事やったということとか、具体的な
これまでの事例とかでもいいんですけど、経験で、こういうときに大学院行
けたらよかったのに、役立ったなあという何かあれば、ちょっとお答えいた
だければと。」

更田氏 「僕も公務員になるまでは、公務員は学部生のほうが多いと思ってました。実際、
まあ僕、自分とこしか知らないんですけども、土木職いうと、結構院卒のほ
うが多いです、実は。イメージ的には、学部卒のほうが多いてイメージもあ
るんですけれども。で、僕、実は去年、まだ公務員になって2年目やったん

ですけども、ちょっと人事部と一緒に採用の面接やらしていただいたんですけど、で、そのときも、実は院卒のほうが多かったんです。学部生、まあそのときは、土木職も事務職も一緒に面接やらしていただいたんですけども、まあ事務職は、どちらかというと学部卒のほうが多かったんですけど、土木職であるとか、建築職であるとかっていう方は、結構院卒のほうが多かったんです。で、実際、働いてても、具体的にいったらあれかもしれないんですけども、40代、50代の方は大学出てたり、高卒の方、専門学校卒の方が多いんですけども、僕、今29なんですけども、僕とか30代の方は、結構学部卒よりも院卒のほうが多いなあ、というイメージがあります。まあほかの方はちょっとわかんないですけども、でも、僕も別の市町村の知り合いの方いて、話聞いている限りは、結構院卒いてるイメージです。やっぱりさっきも僕言わしていただいたんですけども、学部卒があかんでいうわけじゃないんですけども、やっぱり院出てたほうが、なんていうんですかね、第一印象的にも、やっぱりしっかりと、まあ僕自身そうかといえば、どうかなあと思うんですけども、いろいろ考え方持ってるなあっていうイメージがありますね。面接したときにも思ったんですけども。まあちょっと答えはね、わかんないですけども、そんな感じです。」

江種教授 「ありがとうございました。実際に面接を担当されたということで、非常にわかりやすい設問、答えで、ありがとうございました。何かほかに質問ありますか？なんでもいいですよ。あっ、はい、じゃあ。」

女子学生 A 「皆さんの会社のなかで、女性の割合を教えてくださいできればうれしいです。お願いします。」

下村氏 「女性はそんなに、基本的少ないとは思うんですけども、事務の方は、もう男女は関係なしに入ってます。技術職でも入ってますし、研究所や現場に配属されてる人もいます。」

江種教授 「はい、今は。」

下村氏 「最近はあれですね、やはり女性の活躍を支援するというか、機会を増やすということで、女性の管理職も増えていきますし、女性社員は増えてるような気はします。」

塩谷氏 「最近、女性の割合は増えてまして、40人採用したとすると、5~6人は女性

で、多いときは10人近くいる年があったと思います。」

更田氏 「今年入ってくれた方は、女性の土木職で入ってくれてます。で、1つ上の先輩も、まあその人は建築職なんですけども、女性の人、入ってます。まあ実際のところ、ほとんど男性のほうが多いかなあというイメージはあります。ただ、女性の方も採っていきこうっていう感じの動きはあるみたいです。詳細はちょっとわかんないですけども。やっぱり男ばかりでも、女性の方いたほうが、なんていうんですかね、活気づいていいていうイメージです、はい。」

女子学生 A 「ありがとうございます。」

江種教授 「何かほかにありませんでしょうか？はい。」

女子学生 B 「新入社員だとやれることが少なくて、年数、同じ会社にいる年数が増えるごとになんかやれることが変わっていくみたいな、そういう年数によって変わっていく仕事の内容の違いとかあったりするのかなあと思って、そういうのがあったら教えてほしいなというように思います。」

塩谷氏 「うちの会社は新入社員だから部分的な仕事をするというのは少ないと思ってます。早期にやりがいを感じてもらうこともあってか、比較的大きな仕事を任されたりします。」

江種教授 「もう塩谷さんの場合は、職位も変わってると思うんですけど、塩谷さん自身は、どう変わりました？」

塩谷氏 「私の経験でも、比較的若いときから大変な仕事を任されることが多かったです。ただ、今は昔よりフォローされるようになりましたが、私は若い時から大きい仕事をしてきたということがあります」

江種教授 「今、もう課長になって。」

塩谷氏 「そうですね。」

江種教授 「課長になる前というのは。」

塩谷氏 「なる前も比較的ずっと大きな仕事というか、忙しい感じでやってきました。ただ、課長になってからは、別の意味で大変なことが出て苦労してますけども、若いうちから比較的、うちの会社はチャンスがあると思います。」

下村氏 「そうですね、うちの会社も、7か月ぐらいですかね、入ってから研修があって、配属して、1年目は先輩と一緒にですね、現場行ったりとか、設計したりとかして、もう2年目からは1人で、まあ小さな現場は1人で最後までや

って、で、3年目やって、で、4年目ぐらいからもう大きき関係なしに、大きい仕事もかなりしますし、そうですね、まあ人がいないからかわからないんですけども、若い人も1人でみんな個人的にやります。」

江種教授 「更田さんは、公務員で年数が上がって行って、どういうふうになる？先輩の事例等も踏まえて、何か違いがあれば。」

更田氏 「そうですね、前の民間のときは、半年間ぐらい研修あったんですけど、今の公務員になってからは、研修ほとんどないですね、実際。最初の1週間ぐらいは、新卒で入った子とかもいてはるんで、電話対応のマナー対応とかあったんですけども、ほとんど慣れるみたいな感じで、まあ悪く言ったらほったらかしやけど、よく言ったら、やっぱり一緒に、先輩と一緒に行動をとるにして、フォローをしてもらえるみたいな感じですね。こういう職場自体、雰囲気、別に宣伝する訳じゃないですけども、かなりいい感じやとは思ってます。あんまり研修は正直、役所入ってからはなかったです。たまに、1か月に1回ぐらい、ほかの市町村と合同で研修とかはあるんですけども、そんなずうっと長い間研修とかは、正直なかったです。」

女子学生 B 「ありがとうございます。」

江種教授 「いいですか？じゃあ、そうすると、結局、民間企業の方も、公務員のほうも結局、1年目は何、2年目は何てこう、年次的にこうやって、増えていくことが、簡単なことからちょっとずつ難しくなっていくっていうのじゃなくて、いきなりもう、まあ仕事の大きさは小さいかもしれないけど、先輩と変わらない業務を担当していくっていうような感じになるんだと思いました。だから、特に先輩から懇切丁寧に教えてもらいながら学んでいくというよりも、やりながらもう覚えていけと、一緒に。そんな形で進んでいくという感じなんじゃないかな。はい、じゃあ、ありがとうございます。ほかに何かありますか？せつかくの機会ですけども、なんか今疑問に思ってること、聞いてみたいこととか。先生方でも何か、今の話を聞いて。あっ、じゃあ、山本祐吾先生。」

山本准教授 「更田さんの最初のヨシミネさんの文面で、たぶん、皆様の会社情報、学生さんがあんまり知らないというんが最初のほうにあったかなあとと思います。で、まあどうしてもコンシューマー向けで、CMバンバン打ってるわけでは

ないので、なかなか情報は伝わらないんだけど、実ほどの会社も、産業とか暮らしを実はしっかり支えてくれる。あるいは、地球の、地域の環境を守ってくれてる大事な会社で、ぜひそういうところに学生さんの目を向けてほしいなあ、と思うんですけれども、なんかそういう業種、業界の私たちはこういう仕事をやってますというのが学生に伝わるような媒体とか、チャンネルとかって。この雑誌を読んどく、読んどけとかですね、何かあればちょっとヒントいただきたいなと思います。あまり専門誌すぎると、ちょっと難しいかもしれません。」

塩谷氏 「日経新聞」

更田氏 「日経。」

山本氏 「ああ、まあそこはですね。結構環境系の新聞とかだと、いろいろ技術開発の最新の情報とか出てきます。」

江種教授 「環境新聞もありますけど。」

山本氏 「すいません、ちょっと変な質問で。どこで学生さんの目に触れるチャンスがあるのかなあというようで、これから皆さまが就活されるときに、話を伺えるきっかけになるような。」

下村氏 「四季報は学生のとき。」

江種教授 「四季報って知ってるよね。まああとは、もうキャリアセンターのほうにも理系用の就活の業界紹介の雑誌があるんで、そう考えるとたぶん、栗田工業は水ビジネスでところ、今年のは載ってたし。あと、DOWA ホールディングスは非鉄金属という業種に入っていて、また見ればいいと思うけど、たぶん、理系用の業界紹介の雑誌とかになってくるとたぶん、環境、君たちがたぶん、対象となるような会社っていうのは、ここっていうの決まってないんで、プラントエンジニアリング、水処理とか非鉄金属・化学、もちろんゼネコンも含めて、いろんな業界に、まあそういうのを知るためにも、先ほどの四季報という雑誌みたいなのか、日経新聞とかも含めて就活、だから、就職のそういう雑誌とか以外も見とくほうがいいかなという気がします。何かほかにないでしょうか？もう2時になりましたので、そろそろ、なければ締めようかなと思ってますけれども、いいですか？では、これで、第2部の座談会を終わりますので、いろんなところで答えてくれたOBのキャリアの先輩に感謝の

意を込めて拍手を持って終わりたいと思います。どうもありがとうございます。」

一同（拍手）